

## 島田修三著『古代和歌生成史論』を読む

岩下武彦

本書は「まひる野」に拠る歌人として既に「歌集 晴朗悲歌集」以下を持つ著者の、古代和歌に関する研究を纏めたものである。目次によると、全体の構成は以下の通りである。

「第一章 国見歌論」は、「1 国見歌の成立」「2 万葉国見歌への展開」「3 「見れば見ゆ」考」「4 吉野讃歌における国見歌の変容」「5 「見れど飽かず」考——その成立と意味をめぐって」「6 「見れど飽かず」考——中古・中世和歌への展開」「7 「見まく欲る」考」「第二章 旋頭歌論」は、「1 旋頭歌の発生」「2 人麻呂における旋頭歌の位置」「3 倉橋山に立てる白雲」「4 倉橋山に立てる白雲」「第三章 古代和歌の諸相」は、「1 万葉の黒髪——歌語の生成をめぐって」「2 万葉の秋風——季題意識の生成をめぐって」「3 万葉の呪詛と鎮魂」「4 贈答歌考」「5 贈答歌考」「6 万葉「歌語り」考」「7 喩的表現」「8 和歌的修辭と伝統」の各節からそれぞれなる。いずれも既発表の論に加筆した論を含む。「生成史」という書名の通り、古代和歌の表現をその成立に遡り史的に展開する相として、近代短歌をも見通す視野に収めようとする姿勢で一貫している。そういう観点は、実作の経験を持つ

研究者として、著者独自のものであらうと思う。評者は人麻呂を中心として極めて狭い範囲での発言しかしておらず、全体の評には不向きかとも思うが、美夫君志会を通して著者と親しく、また本書も人麻呂の問題に関わるところが大きいので、そういう観点から論評したい。

第一章は、国見歌の成立と展開を辿ることによって、古代和歌の形成を見通そうとする。まず国見歌のタイプの森朝男の説によつて、「対象称揚型」「景物列叙型」と呼ばれる二つの類型に整理し、それらが、在地の共同体の儀礼と、天皇による国見儀礼とそれぞれ表現の場を異にすることで、呪詞から二様に展開してきたのだとする。そういう国見歌の到達点に位置するのが舒明望国歌であり、これを舒明の作として位置づけたのが「白鳳天皇家史観の反映」だという。さらに、国見歌の表現として特有の「見れば見ゆ」「見まく欲る」「見れど飽かず」などの句の成立と展開を見通そうとする。

「国見歌論」「見れど飽かず」の論共に、問題それ自体としては従来も論ぜられ、特に目新しいものではないが、古代和歌の表現を考えるうえで落とすことの出来ない問題であり、殊に発生という観点に立てば、避けて通ることは出来ないと思う。「見れど飽かず」については、吉野讃歌に関して、その称詞としての成立に人麻呂が関わっているであろうことが伊藤博氏によつて指摘されており、旧稿でも述べた事があったが、ここではより具体的に「見れば見ゆ」「見が欲し」などの表現と対比している。

「見れば見ゆ」という形式は「見る」ことは対象の存在を

顕現させる行為、即ち天皇がタマを生成させ、掌握する行為」であり、これに対し「見が欲し」は「国や宮はアブリオリな存在として前提され、『見る』ことを通してその盛んなタマと交流・融合したいという庶幾を述べる表現」で、「見れど飽かず」は、「吉野離宮やその周辺の吉野川流域に」一人の人間がいくら見ても飽くことのない広大無限の神聖なるタマが充滿しているということを用いた表現「だ」という。「見れば見ゆ」から「見が欲し」を経て「見れど飽かず」という展開の相として捉え、「その創出の背景には、『見る』ことを通して、存在の内的生命たるタマとの交流・融合を可能と考える古代的な共同幻想の一端が窺える」という。土橋氏の論を踏まえつつ「見る」表現の歴史を展望する試みとして興味深い。

ただ、「見れば見ゆ」「見が欲し」から「見れど飽かず」のような表現の成立を、発想の点から考えるにはそれで良いとして、伊藤氏『全注』が、「逆接の助詞『ど』で屈折させ、下に否定形を伴うことで、『見る』ことのようなこびや満足感を裏返しに強調する方法はかつてないことであった」という、その様式の違いを具体的に捉えるには、やはり、「口誦から記載へ」という観点を導入する必要があるのではないか。「逆接の助詞で屈折させ、下に否定形を伴う」ような表現は、表現主体の悲しみを生の感情を表す言葉で表すようになる人麻呂以前の段階の抒情表現として、紀歌謡や初期万葉に見られるが、それを讚美の表現として用いるのは、記載のレベルでの抒情表現の発達と不可分だと思われるからである。

次に第二章は、先ず歌謡における繰り返し型の六句体から生成されたものとして旋頭歌の歴史的展開を論ずる。片歌問答と繰り返し型の六句体との記紀における位相の違いから、片歌問答は、記紀の物語の中で初めて有効に生きるものであり、「……記紀における片歌問答は先行する六句体の形式を踏襲したが、その六句体が問答という内容を不可分にもつ形式であったと必ずしも結論することはできない」という。これに対し、繰り返し型の六句体は、記紀の旋頭歌形式の六句体及び片歌問答の祖形として、氏族間に伝承され、宮廷儀礼に奏上された同一片歌の掛け合いに由来するという。

次いで、万葉集中に最多の三五首を残す人麻呂歌集の旋頭歌について詳述する。万葉集中の旋頭歌の分布状況から、旋頭歌は「人麻呂個人と多く関わり合ったものと考えられる」という。その上で、人麻呂歌集旋頭歌は全て人麻呂による創作歌ではないかと推測する。人麻呂歌集旋頭歌の多様な性格は、記紀編纂とも関わり、「人麻呂による旋頭歌という擬古歌体の様々な実験・様々な試行の形跡をとどめた結果」であり、「人麻呂のもった誦詠の場や機会の性格との関連で考えるべき」だという。

全体をそう捉えた上で人麻呂歌集旋頭歌の新しさについて、倉椅の地を詠む三首について分析し、これらは「青春の日の恋の回想を主題とした連作」だとする。その上で記・仁徳の歌謡六九・七〇と関連付け、これに連続する歌語りとして倉椅の地を詠む歌集旋頭歌が連作されたのだという。評者の旧稿への批判を含み、問題提起的である。

先ず、旋頭歌の成り立ちを人麻呂個人と積極的に結びつける点（『擬古歌体』というのは疑問だが）著者の考えに同じたいが、言われるように旋頭歌が成り立ったとすると、それを「発生」というのはそぐわないのではないか。様式に対する明確な意識を以って成り立たしめられたものだと思えば、「成立」という方が適切であろう。殊に旋頭歌の様式を特徴づけるものが、五七七五七七という音数律であるとする、そのように音楽や身体のリズムと切り離された所で、言語そのもののリズムを様式として自覚すること自体が、自然発生的なものとは思えない。旋頭歌の成立を記載のレベルで人麻呂個人と関連付けて考える稲岡耕二氏や神野志隆光氏の指摘と合せて考えるべき所であろう。

次に倉橋の地を詠む三首について。著者はこれを人麻呂による連作と考える。「青春の日の恋の回想を主題とした連作」だとする解釈は魅力的だが、「連作」ということそのものが人麻呂の時代にアブリオリにありえたのかどうか、その事からして問ひ直すべきではないか。評者の旧稿ではその点曖昧な書き方をしており、批判は正当であると思うが、ただ、旧稿では人麻呂歌集を総体として捉えるために、集団の口誦の歌謡の発想と、個の抒情の表現との双方の特徴を有する人麻呂歌集旋頭歌の複雑な性格を追究し

たいという狙いであった。一首一首の解釈に就いては著者の批判を踏まえて改めて考えたいと思う。ただ、個人の作であるとは言っても、その「個人」そのものが近代の「個人」の有り様とは異なるのだから、その解釈に就いては余程の用心が必要であろう。殊に人麻呂歌集の「個」のあり方は、村田正博氏が指摘するように、集団の中から個の自覚の芽生えつつある転換期の様相を示す。その点に注意する必要がある。そういう観点からすると、著者の見方は、やや性急に抒情詩的解釈に引き付け過ぎているのではないだろうか。

第三章は、歌ことはや習俗、方法を通して具体的な問題に即して和歌表現の歴史を展望する。「黒髪」や「秋風」の用法を中国文学のそれと比較しながら丁寧に辿るその態度には共感を覚えた。他の諸論にも啓発される所が多かった。

以上簡宜しきを得ず、また望蜀の言を弄したが、評者との立場の違いを越えて、和歌という形式に寄せる著者の拘りに共感を覚えた。著者の和歌史が今後どのように構築されるのか、歌人としての歩みと共に刮目したい。

（一九九七・七 砂子屋書房 四六判 四一三頁 四八〇〇円）